

# 腹直筋皮弁採取部の腹壁弛緩発生予防

## ● 説明

腹直筋皮弁採取後の合併症の一つに、腹壁弛緩が挙げられます。腹直筋前鞘の縫合法として単結紮縫合が一般的ですが、手術時間がかかることと、糸結び時の振れが移植部位の手術操作に影響を及ぼすという問題があります。対して、連続縫合を行った場合、閉創時間の短縮が見込まれますが、縫合糸が緩んでしまう可能性が考えられます。そこで、連続縫合を行っても緩みにくい「返し付き縫合糸」を用いて、腹壁弛緩の発生数に関して検討しました。

## ● 計算式

$$QI = \frac{\text{腹壁弛緩発生率}}{\text{腹直筋皮弁採取数}} \times 100$$

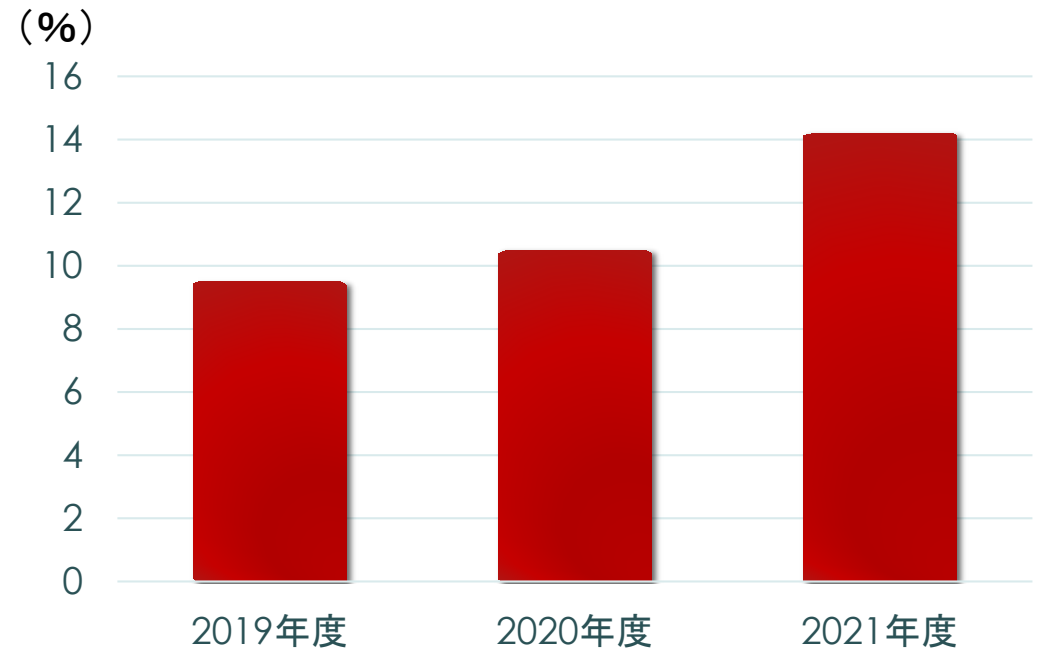
## ● 目標

腹壁弛緩発生率を10%とすることを目標に腹壁弛緩を発生を予防します。

## ● 計画

時間経過とともに発生率に変化が無いのか、長期的な観察が必要と考えています。また、返し付き縫合糸の使用のメリットとして手術時間の短縮に寄与するかの検討も必要となりますので、今後の検討課題としています。

## ● 実績



## ● 評価

他グループからも同様の研究報告が散見されますが、対象症例や観察期間が限られているのが現状です。再建手術を多数行っている当院の特色を生かし、手術を受けられる患者さんにとってより良い手法を提供出来るように努めて参ります。